

2011年3月11日、東北地方太平洋沖をマグニチュード9.0の大地震が襲い、未曾有の津波、そして、福島第一原発事故が起こった。テレビの映像で被害の甚大さを目の当たりにした。被災2年後、私はS牧師に、2泊3日、岩手、宮城、福島、3県の海岸を車で案内してもらった。映像とは違う被害の凄まじさに驚愕した。石巻市の大川小学校の児童74人が津波にさらわれた校庭に立った時は言葉を失った。原発事故から20kmの所に警察官たちが立ち、入れないように検問していた。中に入れるのは、白い防護服を着た除染作業員だけである。身をもって放射能の危険を知らされた。2018年に仙台で、日本基督教団の開拓伝道協議会が開かれ、原発事故の被曝の実態が聞ける集会があると聞き、参加した。期待したほどの被曝実態の報告はなかったが、飯館村と浪江町に行って、帰還困難区域の実態を知った。至る所に黒いフレコンバッグが山積みされているのを見た。テレビやネットで災害の実態を伝える映像を見、講演を聞き、書物を読んだ。死者の葬りを描いた本には涙した。心に突き刺さり、頭から離れないことも多々あった。月額支援金も送り続けた。しかし、私の被災地との関りは、悲惨な現実を見聞きしたものではない。ただ、被災後の東京電力の無責任な対応と原発を押し進める原発行政には怒りが収まらない。

諸々の文学賞を受賞した小説家の古川日出男氏が『ゼロエフ』を上梓している。実家は福島の椎茸生産農家で、子どもの頃は、農作業についていけなかったと言う。古川氏は、360kmを歩き、故郷に生きる人々に聞き歩き、被災地の現実に向き合っている。地震、津波、原発事故の被曝による災害は、それぞれ違うだろうが、愛する人を亡くし、家を失くし、仕事を失くし、故郷を失った。負い切れないほどの苦悩を背負わされた人々の苦難は、なかなか言語化できない。言語化すれば偽りになって受け取られてしまうこともある。古川氏は農家、商家、漁師など一軒一軒を訪ねるようにして、話を聞いている。10年経った今は震災直後のような痛々しい会話は薄れ、淡々と語り合っているが、古川氏にしか聞き出せない貴重な声がある。歩くだけでも疲れるのに、人の話を聞く、しかも、重い人生の話だから、疲労困憊するだろう。福島出身者の責任であるかのように、執拗に地べたからの声を聞こうとした自伝的なルポルタージュである。声高な批判の言葉などはない。歩き、聞き、思索を重ね、言葉の背後に隠された被災悲劇の奥深さを共有している。

題名の「ゼロエフ」とは何か。イチエフは福島第一原発を指すが、「ゼロエフ」は、昔から周期的に津波に襲われてきた国土の記憶であり、戦争と災害による死者のうめき声であり、生と死に関する古川氏自身の原体験でもある。古川氏は、空想上の「ゼロエフ」を道連れにし、生と死に関する対話をしながら旅を続けている。驚くような言葉に出会う。「死者たちを除染しない国家になることが、要る。」放射能に汚染されたところを必死で除染したが、国は人間も除染してしまったのではないか。「いまの歴史は全部勝者の歴史です。勝者が、都合のいいように作っています。それをどうやったら弱者の立場から見直せるか？」勝者として歴史を編纂する国家は、何をしているのか。「復興五輪」と言って、五輪を招致した。今、この言葉を覚え、実行しようと考えている人がいるだろうか。「コロナを乗り越えた証しとしての五輪」と言い換え、必死に五輪開催を目指している。古川氏は、ダイレクトには語らない。新聞のインタビューに答え、被災地で聞いた言葉は、「芽吹かせるとしか、言いようがないですね」と答えている。埋もれた、言葉にならない種を、次世代に芽吹かせると言う。息の長い、忍耐強い視点に敬服する。